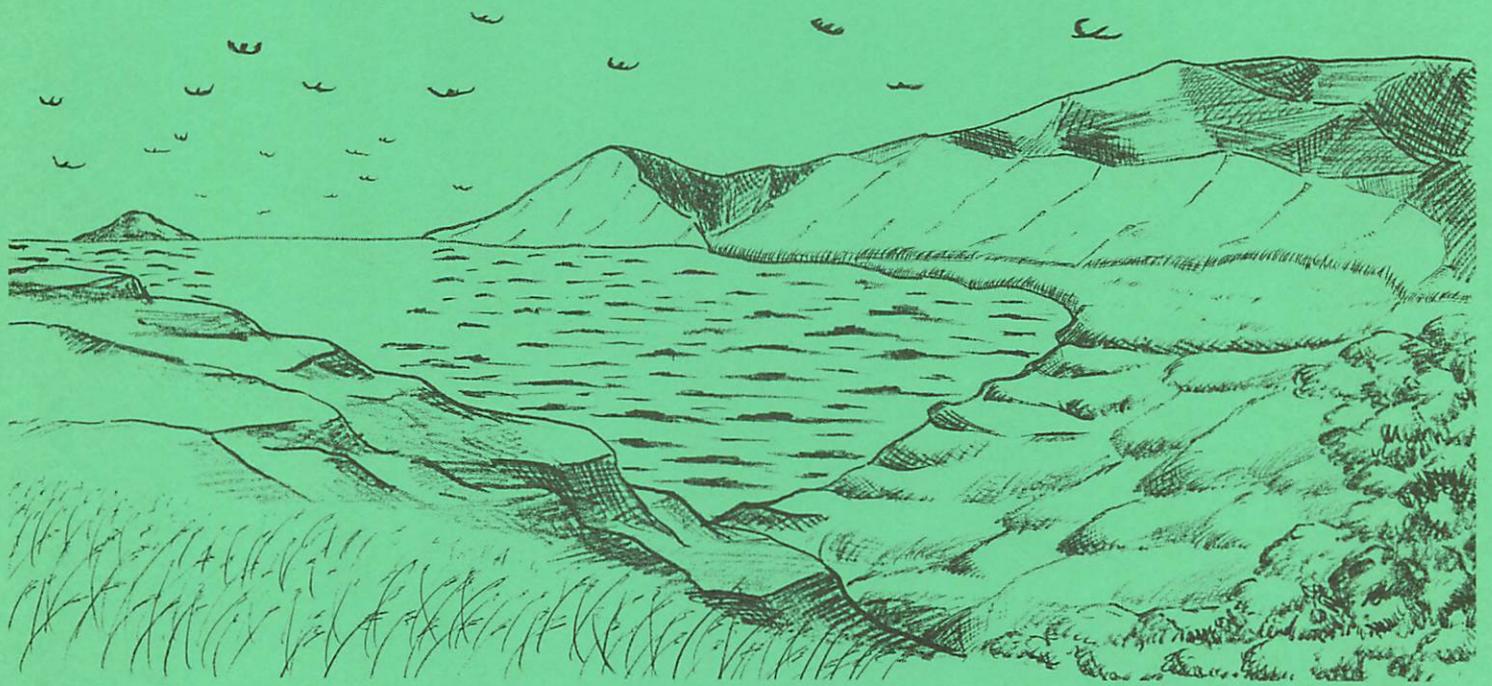


Philomusica Orchestre de Kyoto



Le 31me concert

Le 3 juin 2012

ごあいさつ

本日ここに「京都フィロムジカ管弦楽団」定期演奏会を開催するにあたり、ご多用にも拘わらず、多数の方々のご来場をいただきまして、誠にありがとうございます。

この定期演奏会も、メンバー諸君が仲間と貴重な、しかも楽しい音楽経験を積み重ねて、はや第31回目となりました。今回の演奏会は第29回でも指揮して下さいました、柴愛氏をお迎えし、先生のご指導のもと、ますます努力と研鑽を積み重ね、魅力あふれる交響曲を披露してくれるものと期待致しております。

本日の聴き所は、フランス人で1865年生まれのアルベリック・マニヤール作曲の交響曲第3番です。彼が、世間に知られていないのは生涯就職もせず、フランスの片田舎に引きこもって、作曲に没頭した為で、現代風に言えば「作曲オタク」のハシリでしょう。しかも可哀想な事に、世界大戦中の1914年ドイツ軍により49歳で殺害されたそうです。当時のパルチザンと間違われた為でしょうか、まことにむごい事です。

最後になりましたが、「京都フィロムジカ管弦楽団」の為に、物心両面にわたるご支援を賜りました会員の皆様方をはじめ、ご指導下さいました先生方に厚く御礼申し上げますと共に、定期演奏会のますますの発展を祈りまして、ご挨拶とさせていただきます。

京都フィロムジカ管弦楽団顧問 和田之宏

交響曲は「管弦楽のためのソナタ」と言えます。コンサート最後の演目に演奏されることが多く、長大な堂々たる風格の曲です。当団でもすべての演奏会でこれを取り上げて来ました。作曲する側から見ると、交響曲を書くということはおそらくその作曲家の最終到達点でしょう。そのジャンルは過去の巨匠たちが苦心して作り上げたものであり、簡単には立ち入ることのできない聖域とも言えます。

交響曲と名乗るためには一定のルールを守らなければなりません。四つの楽章を作り、うちひとつはソナタ形式を採用します。主題を二つ用意し、それを展開しそれぞれに調性を配慮、緩徐楽章、スケルツォと続き、最後の楽章まで動機が各楽章間で関連性を持つよう工夫し、ひとつの大きなストーリーになるようにします。途中でフーガを盛り込んだり管弦楽法を駆使したりして自分の持てる限りの技術をつめ込みます。形式という枠があるからこそ、作曲家はそのなかで何ができるかという腕を競い合えるような気がします。「こんな抒情的な曲が本当に交響曲なのか」といった感覚を聴衆にもたせることができれば、その作曲家は巨匠の仲間入りといえるかもしれません。きょうは交響曲を二曲演奏します。どうぞ最後までごゆっくり作品をお楽しみください。

京都フィロムジカ管弦楽団団長 長岡武志

京都芸術センター制作支援事業

京都フィロムジカ管弦楽団 第31回定期演奏会

2012年6月3日(日) 午後2時開演 京都府長岡京記念文化会館

1:15～ ロビーコンサート

🌀 Programme 🌀

リルバーン (1915-2001) / 『島の歌』 ※ニュージーランド国外初演
Douglas Lilburn : A Song of Islands

ベートーベン (1770-1827) / 交響曲第1番ハ長調
Ludwig van Beethoven : Symphonie Nr. 1 C-dur op. 21
I. Adagio molto - Allegro con brio
II. Andante cantabile con moto
III. Menuetto: Allegro molto e vivace
IV. Adagio - Allegro molto e vivace

— 休憩 —

マニャール (1865-1914) / 交響曲第3番変ロ短調作品11
Albéric Magnard : Symphonie n° 3 en si bémol mineur op. 11
I. Introduction et ouverture
II. Danses
III. Pastorale
IV. Final

指揮 柴 愛

お客様へのお願い

～誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします～

- 携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器をお持ちの場合は、電源を必ずお切りください。
- 演奏中の私語は固くお断りいたします。
- 客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。
- 補聴器が異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。
- 演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。
- 「咳エチケット」にご協力ください。咳、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオル等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。なお、演奏中の「のど飴」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。
- 演奏者が音を出していなくても音楽が続いている場合がありますので、物音をお立てにならないよう、ご注意ください。

指揮者

柴 愛 (しば あい)



同志社女子大学学芸学部音楽学科演奏バイオリン専攻 卒業。バイオリンを梅原ひまり氏に師事。在学中より、ザ・カレッジオペラハウス、関西二期会、関西歌劇団などで、飯守泰次郎氏、牧村邦彦氏らのアシスタントを務める。

2006年には、イタリア プッチーニフェスティバル、堺シティオペライタリア公演において副指揮者として公演に同行する。

2010年より、神戸市民文化振興財団「アドベンチャー事業」レインボーハウス支援チャリティーオペラにおいて、モーツァルト「コジ・ファン・トゥッテ」、ドニゼッティ「ドン パスグアーレ」、「愛の妙薬」を指揮するなど、指揮者としての活動の場を広げている。

2010年ウィーン国際音楽ゼミナールにおいて Andres Orozco-Estrada 氏に師事、ディプロムを取得。

これまでに、指揮を高階正光氏、Klaus Hoevelmann 氏、Niels Muus 氏らに師事。

♪ロビーコンサート♪

13:15より

モーツァルト／セレナード第12番ハ短調 より 第1楽章

Ob.: 沼生、栗山 Cl.: 関、黒田 Fg.: 石塚、桃川 Hr.: 黒田、草木

…1782年に作曲されたとされるこの曲は、モーツァルトが残したセレナードの中で唯一短調で書かれた曲です。と言っても暗い響きはなく、この頃にモーツァルトが体験したバロック音楽の影響とも見られる、木管楽器8本の重厚なハーモニーが満喫できる一曲です。どうぞお楽しみください。(栗山)

ベートーベン／弦楽四重奏曲第4番 より 第1楽章

Vn.: 芦原、山口 Va.: 吉川 Vc.: 小野

…この曲は、交響曲第1番と同じ年に作曲されました。交響曲第1番のハ長調に対して、この曲はハ短調。運命と同じ調で書かれております。

今回は第1楽章を演奏します。情熱的な主題が印象的な曲です。(山口)

印刷のことなら

大地社

〒602-0858

京都市上京区河原町荒神口上ル二筋目東入ル

T E L (075) 231-1727 (代)

F A X (075) 256-4604

曲目解説

Tp. : 遠藤 啓輔

リルバーン／『島の歌』

経済の不安と社会の劣化が、まだ文化にまでは腐蝕の手を拡げていなかったそう遠くない昔、「アジア・オーケストラ・ウィーク」という、それはそれは楽しい音楽祭があった^(注1)。これは、アジアとオセアニア各地から来日した幾団体ものオーケストラが東京と大阪で入れ替わり立ち替わり毎日演奏会を開く、という祭典だった（「アジア」と名付けていながらなぜオセアニアからも来るのか？という疑問はこの際不問にする）。しかも素晴らしかったのは、前プロはご当地作曲家の作品、中プロはご当地出身ソリストによるコンチェルト、後半は楽団の真価を世に問う大曲、というプログラミング方針が貫徹されていたこと。アジアとオセアニア各地の個性豊かな作曲家、ソリスト、指揮者、オーケストラをシンフォニーホールで毎日楽しむことができる楽しい1週間であった。この音楽祭がいかに楽しかったかということについては別項をご参照いただきたいが^(注2)、僕にとってこの音楽祭での最大の収穫は、リルバーンという作曲家の存在を知ることができたことだ。2003年に出演したニュージーランド響がリルバーン作曲の『アオテアロア序曲』を演奏したのだ。シンフォニーホールに爽やかな響きが吹き渡った時の新鮮な衝撃を今でもよく覚えている。演奏時間10分にも満たない小品だったのに、どこか懐かしささえ感じさせる優しくしなやかな音楽を聴いた時の幸福感を今も忘れることができない。配布パンフレットで、リルバーンはヴォーン・ウィリアムズに師事したと知り、なるほど、師譲りの淡い色彩感としなやかな音楽運び、そして師が評価していたシベリウスを思わせる透明感を持ち合わせた魅力的な音をもっているのだな、と納得した。その一方、どこか乾いた空気感と鬼気迫る神秘性もあり、師の亜流では決してない独創性をも持ち合わせた偉大な作曲家だと感じた。それ以降、僕はリルバーンに興味を持った。

ダグラス・リルバーン（1915－2001）が生まれたニュージーランドはご存知の通り南太平洋の島国で、複雑な姿を見せる豊かな自然と温暖で穏やかな気候に恵まれている。先住民としてマオリ族が住んでいたが、19世紀にイギリスの植民地となり、20世紀に独立した後もイギリスとの関係が深い。その一方、マオリ族と入植した白人との間の軋轢は戦争にまで発展したが、19世紀末からその対立を克服していき、多文化・多言語の共存する文化を築いていった。住民は、自然と平和を愛し、英連邦の一員であることよりも太平洋の島々の一員としての自覚を深めつつあるという^(注3)。リルバーンはイギリスに留学しヴォーン・ウィリアムズに師事した。ヴォーン・ウィリアムズは『民族音楽論』^(注4)を著したことからわかるように民謡に音楽の源泉を求めた人物である一方、ラヴェルに師事したオーケストレイションの名手でもあり、同時代の作曲家としてはシベリウスを評価していた。リルバーンはこの師ヴォーン・ウィリアムズの影響を相当に受けているようだ。僕が聴いた『アオテアロア序曲』の「アオテアロア」とは「白雲が長くたなびく地」という意味のマオリ語で、自然の美しいニュージーランドを指す雅語といえよう。自然を愛する太平洋の島々の一員という自らの民族性を意識しているのだろう。また、簡潔な楽器編成でありながらも各々の楽器の音色を生かして瑞々しい響きを生み出すオーケストレイションはまさに職人技だ。さらに、神出鬼没の楽想や妖気の漂う空気感はシベリウスと通じるものを感じさせる。

幸いなことに、リルバーン作品はNAXOSレーベルから交響曲集と管弦楽曲集のCDが発売されていて容易に入手でき、一部の作品は楽譜の輸入もできた。今回演奏する『島の歌』は、それらの中でも最も優れていると僕が感じた作品だ。輝かしさと厳しさが同居した自然賛歌であり、その点でシベリウスの最高傑作『タピオラ』や第7交響曲を連想させる（個人的には「海のタピオラ」と評したいぐらいだ）。一方で、弦楽器の透き通った響きや木管の朴訥とした音色を生かしたオーケストレイションは同じシベリウスでも第6交響曲との共通性が感じられる。もちろん先人からの影響ばかりでなくリルバーンの独自性もあふれてお

り、特に、乾いた風が吹き抜けるようなスピード感や、半音階を多用した艶っぽい色合いが魅力的だ。1946年、作曲者30歳代の作品。こう書くと若書きの作品のように思われるかもしれないが、彼は後半生に電子音楽に傾倒し、1961年の第3交響曲以降は目立ったオーケストラ曲を書いていない。したがって、『島の歌』はオーケストラ作曲家としてのリルバーンの円熟期の作品と呼んで良いだろう。この『島の歌 (A Song of Islands)』は初演当初は『Song of the Antipodes (アンティポデス諸島の歌)』という題名だったそう(注5)。アンティポデス諸島とは、ニュージーランド本土のさらに南東、南極に近い海に浮かぶ無人島である。乱獲でアザラシが激減するなどのダメージがあったが、現在はニュージーランド亜南極諸島の一部として世界自然遺産になっている。リルバーンはおそらく、人間によって壊されかけた、しかし力強くよみがえったアンティポデス諸島の無垢なる自然の姿に思いをはせて作曲したのだろう。それを『A Song of Islands』へと改題したのは、その無垢なる自然の素晴らしさが、決して特定の諸島に限定されるものではなく、普遍性をもったものであるという意識からであろうと想像する。今回、僕たちはNAXOSレーベル発売のCDで使用されたのと同じ『島の歌』の訳題を使用した。この訳題が適切かどうか、かなり悩んだ。song が単数形なのに islands は複数形である、という矛盾を感じさせる原題も悩まされた原因の一つだ。『島々の歌』や『諸島の歌』とすべきかとも考えたが、最も簡潔で、最も普遍性を感じさせる『島の歌』がやはり適切だ、と結論した。複数形の islands は、大自然の多様な姿を島によって象徴したのであり、その大自然が人間に湧き起こさせる感興を「歌」(音楽)にしたのだ、と類推する。また、冠詞の「A」が使用されているのは、師ヴォーン・ウィリアムズの作品で、僕たちが14回定期で演奏した『A pastoral symphony』の影響があるのかもしれない。いずれも、「The」ではなく「A」が使用されたことによって、特定地域をモデルに描いた音楽ではなく、普遍性をもった自然の姿のある一側面を音で描いた、という印象を喚起する。

作品は、短い演奏時間の中に多様な表情が盛り込まれるが、冒頭で演奏された中心主題が要所で回想されてフレームの役割を果たしている。冒頭、一瞬「ファ#・ラ・ド#」の和声が鳴るが、すぐに根音の「レ」が加わり、ニ長調の和声となる。ニ長調は神を讃える調、あるいは神による救済の調と言えるので、この作品が単なる自然描写ではなく、自然の崇高な姿の中に神の姿を感じ取り、そこから靈感を得た作品と考えることもできよう。この和声の中から情感に溢れた弦楽器の歌が立ち上り、それに管楽器も加わって、太陽が昇るような輝かしい響きをつくりだして幕開ける。その後は、大洋のエネルギーを想起させる低音のうごめき、疾風が吹き渡るような爽やかなスピード感、岩礁のように硬質で彫琢のはっきりした音楽など、自然の多様な姿が描かれ、それらを、冒頭で示された情感豊かな歌と輝かしい響きによって結び付けている。最後は夕景のような蔭りを見せる中、神々しいニ長調の和声(レ・ファ#・ラ)へと静かに帰っていく。

本日の演奏は、日本初演であるのは勿論、ニュージーランド国外における初めての演奏となる。皆さんは、普遍的な自然の素晴らしさを描いたこの傑作が、ニュージーランドという特定地域の宝から人類普遍の宝へと飛翔する瞬間に居合わせることになる。折しも京都は緑鮮やかな初夏。遠い南の島から運ばれてきた爽やかな音楽の風を存分に浴びていただきたい。

注1：僕は過去形で書いたが、アジア・オーケストラ・ウィークは現在も継続しているようだ。しかしながら、大阪での公演が無くなるなど、かつての楽しさを見る影もない (<http://www.orchestra.or.jp/aow2011/>)

注2：<http://www.ostmeerphilharmoniker.com/columnlive003.php>

注3：『オセアニアを知る事典』平凡社、2000年新訂補版に依る

注4：レイフ・ヴォーン・ウィリアムズ著／塚谷晃弘訳『民族音楽論』雄山閣、1984

注5：[http://www.promethean-editions.com/php/WorkDetail.php?WorkID=81&Composer=Douglas Lilburn&ComposerID=19](http://www.promethean-editions.com/php/WorkDetail.php?WorkID=81&Composer=Douglas%20Lilburn&ComposerID=19)

なお、ヨーロッパ側から見て地球の裏側という意味で、オーストラリアとニュージーランドを総称して the Antipodes (「対極」という意味)と呼ぶこともあるようだ。そうすると、イギリスへの留学経験のあるリルバーンが、故郷をヨーロッパ側から見て思慕した作品、という解釈もできるかもしれない。もっとも、『A Song of Islands』への改題が普遍性をもたらした、という評価は同じであろう。

ベートーベン／交響曲第1番ハ長調

僕はしばしば、良く言えば独自の視点で、悪く言えば全く恣意的に、作曲家評を論じては「また遠藤の『オレ基準』が始まったよ」と周囲の顰蹙を買うのだが、そうした僕の身勝手な作曲家分類の一つに「シンフォニストのベートーベン型とシベリウス型」がある。交響曲をライフワークとした作曲家のうち、早くも第1交響曲から独創的な傑作を書き、駄作をいっさい書かなかったシンフォニストが「ベートーベン型」で、ベートーベンのほか、ブルックナー、ショスタコーヴィチがその典型。一方、ある時期に突如として才能が開花し、それ以前と以後では独創性や深みがまるで異なるシンフォニストが「シベリウス型」。シベリウスのほか、マーラーやチャイコフスキーがその典型。こんな「オレ基準」には囂々の非難があるだろうが、しかしながら、「第1交響曲がベートーベンの独創的傑作である」という点については異論の余地はなからう。

それではベートーベンの独創性とは何か。この偉大な音楽を文字によって表現しようとする事自体が無謀なのだけれど、一つ強調しておきたいのは、ベートーベンの音楽は「おもしろい」ということ。音楽室の肖像画の悪影響だろうが、どうも「ベートーベン」というと「苦悩に打ち勝つ意志の強さ」だの「揺るぐことのない高い精神性」だのといった糞真面目なお題目が並ぶ傾向があるような気がする。もちろんそれらもひっくるめてベートーベンの広範な魅力が形成されるのだけれど、ベートーベンの音楽に満ち溢れたギャク的なおかしみや人を食った冗談や底抜けの哄笑といった楽しい側面ももっと強調されていいんじゃないか。第1交響曲はそうしたベートーベンの楽しさ満載の傑作なのだ。

まず冒頭。ゆったりとしたアダージョの序奏が置かれ、木管楽器の美しい和声で始まる。この冒頭の和声が当時としては斬新な4声からなるのは有名。ハ長調の作品なので「ド・ミ・ソ」から構成されているのだが、この曲の冒頭にはもう1音「シb」が加わって不思議な色合いを醸し出しているのだ。さらに、この木管の和音の冒頭を弦のピッツィカートが小気味良く縁取っており、挑発的な和声と品の良いオーケストレーションが同居した、独創的な第1小節目となっている。2小節目も同様の音楽が続き、このまま不思議さと典雅さが程良く融合した音楽がゆっくりと流れていくのかと思いきや、3小節目でクレッシェンドが猛然と沸き起こり、4小節目でとどめを刺すようにフル・オーケストラの大音響が打ち込まれる。聴衆の予測を裏切る大胆な冗談であるのと同時に（ベートーベンが舌を出して笑っているのが見えるかのようだ）、この曲が逞しいパワフルな作品であることを宣言しているのだ。革命的なオーケストレーション、予断を裏切る意地悪なギャグ精神、破格のパワー、冒頭わずか4小節にして、聴衆は完全にベートーベン・ワールドに引きずり込まれてしまう。大ベートーベンのシンフォニスト・デビューにふさわしい幕開けではないか！

アレグロの主部に入るとベートーベン・ワールドがさらに凄味を見せる。ベートーベンの恐るべき天才性は、極めて単純な素材から物凄い音楽を書きあげてしまうという点に端的に表れている。たとえば譜例1は第1楽章の主要な要素だが、ハ長調の分散和音（ド・ミ・ソ）と下降する音階（ファミレド）をくっつけただけで、何のひねりもない。このような安直な主題が、ベートーベンの手にかかれば推進力としなやかな力強さに満ちた音楽に変貌してしまうのだから感服する。さらに凄いのは、この単純な要素が、各楽章を有機的に結びつける役割を果たしていることだ。例えば譜例2の第2楽章の冒頭は、分散和音（ファ・ラ・ド）的に上昇し音階で下降するという構造が譜例1と同じである。また、第3楽章ではトリオ（中間部）で譜例1の後半部分である下降音階が執拗に繰り返されるし、第4楽章の第1主題（譜例3）は、音階的に上昇して分散和音（ド・ミ・ソ）的に下降することから、譜例1の構造を逆転させたものといえる。このようにして各楽章の主題に共通性を持たせることで、性格が異なる4つの楽章の集合体でありながらも、それぞれが緊密な関係性を持った有機的構造物としての大シンフォニーを形成しているのである。若干29歳の傑作だ。

第1楽章：前述のとおりアダージョの序奏を持つアレグロの楽章。人を食ったような極端な強弱の変化、次々と湧き上がる楽想、覇気に満ちた楽章の終結などに、青年作曲家の大胆さと意気込みとが表れている。

第2楽章：速度指定はアンダンテで、落ち着いた歩みの中にも程好い推進力を持つ（譜例2）。一見のど

かな表情を装うが、実はベートーベン得意の複雑な対位法が駆使された凝りに凝った音楽だ。

第3楽章：舞曲の「メヌエット」を第3楽章に置いているが、攻撃的で底抜けに明るい表情は舞曲というよりもスケルツォ（諧謔曲）に近い。スケルツォを得意としたベートーベンの才能はやはり第1交響曲から花開いているのである。トリオ（中間部）は管楽器の豊潤な響きが初演当時から話題になった。

第4楽章：アダージョの序奏では、下降音階の反行形ともいべき単純な上昇音階が途切れ途切れに繰り返される。この先の音楽の展開を不安にさせるようなためらいがちな音楽にもかかわらず、アレグロの主部に入ると、序奏での不安を全く忘れたように快速の音楽が猛進する（譜例3）。



譜例1 第1楽章（部分）



譜例2 第2楽章（冒頭）



譜例3 第4楽章（第1主題）

マニャール／交響曲第3番変口短調

僕が「マニャール」の名を聞いたのは、交響曲の来し方行く末について思索を重ねている音楽好きの友人から勧められたのが初めてだった。とはいってもスペルもわからないので音源を捜すことすらできずにいたところ、タイミングの良いことに、コントラバスの藤井君が推薦曲として音源を提出してきた。選曲会議では「こんなすごい作曲家がいたとは！」と団員が驚愕に近い反応を示し晴れて演奏が決定。「もしや日本初演では？」と期待したが、横浜のアマチュア・オーケストラが既に演奏していたとのこと。また、音楽愛好家仲間に今日の演奏会のチラシを配ると「なんと、ついにマニャールを演奏するのですか！」「マニャール、いい作曲家ですよ」という好意的な反応が多々見られたので（リルバーンは例外なしに「誰それ？」という反応だったのにもかかわらず）、熱心な音楽愛好家の間でマニャールは注視すべき存在となっているようだ。実は水面下でマニャール・ルネサンスが起きつつあるのかもしれない。

アルベリック・マニャール。1865年パリ生まれ。幼少よりピアノを学ぶものの、青年時代は法学を修めていた。しかし、ヴァーグナーの楽劇『トリスタンとイゾルデ』に感動して音楽家になることを決意、ようやく20歳代になってからパリ音楽院に入学、という遅咲きの音楽家人生を歩む。デュボワ、マスネ、ダンディに師事するが、このすぐれた指導者たちがマニャールの音楽に決定的な影響を与えたものと思われる。デュボワは新しい音楽の潮流に流されることなく、旋律と調性の伝統を堅持した音楽家である。また前回の定期演奏会をお聴きいただいた方は覚えておられると思うが、マスネはオーケストラの扱いに長けた職人的作曲家だ。そしてダンディは懐の深い音楽家で、ヴァーグナーなどドイツロマン派の影響を強く受ける一方、フォーレ、ドビュッシー、ラヴェルら革新的なフランス音楽にも理解を示し、さらにはラモー（18世紀フランスの作曲家・教会オルガニスト・音楽理論家。彼のオペラは今日でもよく演奏される。）の作品を蘇演するなど古典にも通じた人物だった。賛美歌風の清らかで伸びやかな旋律美、複雑な対位法を駆使した堅牢さ、質実剛健な洪い響きと明るく洒脱な音色の鮮烈な対比、ライトモチーフによって曲全体がつながりを持った綿密な構成、こうしたマニャールの音楽の特徴は、恩師たちの指導を昇華したものといえよう。

加えてマニャールの音楽に大きな影響を与えたものは、彼が後半生を送った田園地帯での生活であろう。パリの郊外には自然や歴史遺産に恵まれた田園地帯が広がっている。30歳代から耳の疾患に悩まされるようになったマニャールは、社交を避け、こうした田園地帯の一つであるオワーズ県の町バロンに隠棲するようになる。バロンにほど近い古都サンリスにはノートルダム大聖堂の高さ80メートル近い尖塔がそびえ、何と古代ローマ帝国の時代にまでさかのぼるとされる城壁が残る。また、オワーズ県の中心地都市ボーヴェはジャンヌ・ダルクを無理やり死刑にしたことで悪名高いピエール・コーションが司教を務めていたことでも知られる。さらに、穏やかな光が緑を輝かせるような丘陵地帯が広がるオワーズ川流域は、セザンヌ、ゴッ

ッホ、コローといった画家たちを魅了した。マニャールはこうした恵まれた環境の中で作曲に没頭した。数多の画家たちを魅了した豊穡な風景、厳粛な祈りの聖堂、血と欲望と憎悪で塗り重ねられた歴史と、そうしたおぞましい人間の営みを丸ごと包摂してきた寛容な自然、こうした田園地帯での豊かな精神生活が、マニャールの音楽に深みを与えているものと思われる。そして、マニャールはこの環境を愛し過ぎたのだろう。第1次世界大戦が勃発しても彼は疎開することなく自宅を守り、侵攻してきたドイツ兵と交戦し惨殺される。ヴァーグナーを愛好しベートーベンを範としたマニャールが、ドイツ人に殺されるとは誠にやりきれない。

マニャールは4曲の交響曲を残しており、いずれも4楽章構成の古典的な形式美を誇り、さらに各曲が異なる個性で輝いている。覇気に満ちた英雄的風格が魅力である逞しい第1番。瑞々しくしなやかな旋律が軽やかに飛び交う輝かしい第2番。豊潤な響きと不穏な空気が独特の世界を作り上げる傑作第4番。そして、今回僕たちが演奏する第3番は、最も簡潔で最も古典的な体裁をとりつつ、彼が愛した田園地帯の感興を存分に盛り込んだ作品、といえよう。彼の他の交響曲とは異なり、楽器編成は極めて抑制されており、木管楽器は基本的に2管編成、ピッコロやコントラファゴット、チューバといった音域を上下に拡張する管楽器も敢えて除外され、さらには金管楽器に常に弱めの音量を指定して響きが華美になるのを防いでいる。こうした徹底的に簡素なオーケストレイションによって、素材で渋い音色と優しく穏やかな表情を生み出している。

第1楽章は『導入と序曲』と題されており、緩-急-緩の3部形式からなるフランス風序曲とみなすことができる。管楽器によるコラール（賛美歌風の旋律）によって厳粛に始まる（譜例4）。旋律線は短調的なほの暗いものであるが、驚くことに、それぞれの音に徹頭徹尾いわゆる「空5度（「ド・ミ・ソ」の「ミ」の音を欠く和音。ミ \sharp であれば長調、ミ \flat であれば短調になるはずだが、その音を欠くため、長調か短調か判別できない響きが生まれる）」となる和声が施されている。これによって、長調とも短調ともつかない不穏な響きが聴く者の心を揺さぶる。このコラール主題が繰り返し歌われるその隙間を縫うようにして、この曲で唯一用いられた特殊楽器であるイングリッシュホルンが、中低弦とともに悲痛な叫び声をあげる（譜例5）。イングリッシュホルンは音域が人の声に近く、喉の底から絞り上げるような音がするので、告発者のような凄味をもった役回りを演じることが多い（典型は地獄に棲む白鳥を描いたシベリウスの『トゥオネラの白鳥』）。神々しくも不穏なコラールと、告発者の悲痛な叫びが応答しながら序奏が進行するが、これらは各楽章の要所で顔を出して全曲の統一感を持たせる「固定楽想（イデー・フィクス）」の役割も果たす。アレグロの主部は、疾駆するようなスピード感を持った主題群が交錯する闘争的な部分（A）と、輝きに満ちた楽想が穏やかにうたわれる部分（B）が交互にくりかえされる。両者は鮮明に対比され、特にAからBへの変化は、突如として視界が明るく開けるような爽快感がある。楽章の最後はコラール主題（譜例4）が再現されたのち、楽章の主要要素がゆっくりと回想され、明るく優しい響きの中で閉じられる。

第2楽章は『ダンス』。交響曲の中間楽章に舞曲が用いられるのは古典交響曲の定石通り（メヌエットが用いられることが多い）であるが、敢えて『ダンス』と題したのは、この楽章が宮廷的なメヌエットではなく民俗的で野性的な力に満ちた舞曲だからだろう。日差しを浴びているような明るい響き、時折挿入される土俗的な力に満ちたヴァイオリンのソロからは、田園のなかでヴァイオリンを弾きながら乱舞する逞しい農民たちの姿が見えるようだ。変拍子の複雑なステップを踏んだかと思えば（譜例6）、4小節単位の単純な進行に変化したりする、実に振幅の大きな音楽で、それが野卑な力強さを一層印象付ける。激しく跳躍する動機が印象的に打ち込まれるが（譜例6）、これは第1楽章のイングリッシュホルンの旋律に由来する（譜例5のIIと譜例6のII参照）。中間部はまどろむような穏やかな音楽に変貌する。踊り疲れてしばしの休息を、といったところか。のどかさの中にも、1楽章のコラール主題を想起させる厳粛さが潜んでいる。中間部が終わるとティンパニの連打に導かれてダンスが激しく再燃する。一瞬、中間部の主題が顔をのぞかせるが、それも束の間、收拾のつかない盛り上がりを強制終了するかのようにならなく閉じられる。

第3楽章は『パストラレ』と題されており、田園的な広がりや牧歌的な穏やかさをもちあわせる。牧童の笛を思わせるオーボエのソロで始まるが（譜例7）、この旋律もイデー・フィクスに由来する（譜例4

のⅢと譜例7のⅢ（参照）。時折、ファゴットと低弦による激しい動きが襲ってくるが、これは牧神パーンの叫び声であろうか。パーンは陽気な牧神で葦笛の名手でもあるが、大好きな昼寝を邪魔されると恐ろしい叫び声をあげて人々を驚かせるとされる（「パニック」の語源）。クライマックスでは、田園に嵐が襲ってきたような慄然とさせられる音楽になるが、やがてそれも過ぎ去り、穏やかにフェードアウトしていく。

第4楽章は『フィナーレ』。オクターヴ跳躍を伴う逞しい主題が繰り返される躍動的な音楽が展開されるが、徐々にイデー・フィクスが重要性を増してくる。特にコラール旋律（譜例4）は、周到的な準備を経て壮大なクライマックスを形作る。まず楽章の中程で、神の声を代弁する楽器であるトロンボーンの厳粛なソロがコラール旋律を予告すると、終盤になって管楽器の合奏がコラール旋律を再現する。最初は第1楽章冒頭と同様、空5度の和声が施されているが、弦楽器が長調の分散和音を伴奏することで、長調への流れが予感される。やがて管楽器も長調の和声を吹奏して輝きを増し、ついに旋律線自体が長調に変化して閃光を発するようなクライマックスを形作るのである（譜例8 譜例4では「ミ♭→ソ♭」と短調的な旋律だったが、譜例8では「ミ♭→ソ♮」と長調的な旋律になる）。コーダではフィナーレの主題とコラール主題の短縮形（譜例9）が連呼され、最後はトランペットとトロンボーンを除外したやわらかな響きで閉じられる。



譜例4 第1楽章・冒頭



譜例5 第1楽章・序奏（部分）



譜例6 第2楽章（部分）



譜例7 第3楽章・冒頭



譜例8 第4楽章・コラール主題の末尾



譜例9 第4楽章（部分）

京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

松村 里香様
杉本 幸子様
安藤 美知穂様
遠藤 時金様
鎗本 和弘様
吉田 育弘様
吉田 寛子様
木下 清美様

西坂 壽美子様
小松 朋美様
鈴木 一俊様
辻 良治様
西 英子様
浅野 節子様
福田 稔様
金谷 一紀様

古川 宏様
竹野 繁也様
市川 寛様
出村 勝正様
河内 尚和様
坂口 尚史様
森永 千一様

2002年4月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。（5月現在）

京都フィロムジカ管弦楽団

Philomusica Orchestre de Kyoto

Violon solo	Altos	Flûtes	Cors	顧問
相本 朋子※	井田 麻弥・ 上田 秀樹・ 丸山 圭一・ 吉川 昌毅・ 吉田 絢香・ 國分 絵里香※ 高原 友洋※	海堀 梓 山口 佳美 村瀬 満早子・	片山 真吾 草木 美佐子 黒田 直樹JAMES 長岡 武志 増田 亜由美・ 田崎 文得※	和田 之宏 団長 長岡 武志 事務 西村 浩 邑橋 明子
Violons	Violoncelles	Hautbois	Trompettes	
小幡 拓也 村中 三喜保 山口 陽平 芦原 靖子・ 飯田 俊也・ 内藤 佐紀・ 西澤 理会子・ 西村 祐司・ 南尾 真衣・ 森川 貴之・ 安江 絵美子・ 吉川 正剛・ 米田 彩香・ 渡辺 達之輔・ 井川 直樹※ 池田 純子※ 上田 晶子※ 内田 佳子※ 富宅 光※ 北條 エレナ※ 安原 由克子※ 山本 麻奈実※	小野 健太郎 多田 進 Ian Dickinson 塚田 毅・ 秦野 貴生・ 松浦 悟子・ 岡野 正義※	栗山 才子 沼生 智晴・	遠藤 啓輔 山口 鮎美・ 山本 桂・	
	Contrebasses	Cor anglais	Trombones	
	茂原 尚樹 田中 郁太郎 鳥山 拓 中平 明江 藤井 輝之 細木 蘭子・ 丸山 拓史・	脇田 貴文・	宮下 秀行 前村 哲人※	
		Clarinettes	Trombone-basse	
		黒田 菜穂子 関 英子	藤井 舞	
		Bassons	Timbales	
		石塚 有里子 濱田 ひとみ 桃川 大毅※	初井 渉※	

・ : 団友
※ : 客演奏者

弦トレーナー・客演コンサートミストレス

相本 朋子

慶應義塾大学卒業、桐朋オーケストラアカデミー修了。ヴァイオリンを光永俊彦、澤和樹、若林暢、戸澤哲夫の各氏に師事。2009年より京都市交響楽団ヴァイオリン奏者。

弦トレーナー

岩井 英樹

名古屋芸術大学卒業。ヴィオラを西岡正臣、ウルリッヒ・コッホ、ジークフリート・ヒュアリンガーの各氏に師事。1997年より大阪フィルハーモニー交響楽団ヴィオラ奏者。

管トレーナー

山崎 雅夫

京都大学卒業。現在、京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC. マクベス、A. ハーゼス、M. アンドレの各氏に師事。

京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

♪第32回定期演奏会♪

2013年1月20日(日) びわ湖ホール(大ホール)

ボロディン/歌劇『イーゴリ公』序曲

ベートーベン/交響曲第5番/短調

デュカス/交響曲八長調

(予定)

♪新入団員随時募集中♪

～私たちと一緒に演奏しませんか? まずはお気軽に見学にお越しください。団員一同、お待ちしております。～

私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿のみならず全国各地に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいきます。

「一緒に演奏したい!」という皆様のご参加をお待ちしています。

<募集パート>

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ (弦楽器急募!!)

フルート・オーボエ・クラリネット・ファゴット

ホルン・トランペット・テナー・トロンボーン・打楽器

※管楽器・打楽器は簡単なオーディションをおこなっております。

〔練習日時〕 毎週日曜日 午後1時～午後5時 春と秋に2泊3日の練習合宿(大津市内)

〔練習場所〕 京都芸術センター、および河原町丸太町・荒神口周辺など京都市内各所

〔諸費用〕 活動費:3,000円/月 合宿費:10,000円程度 演奏会参加費:20,000～30,000円(学生は半額)

入団・見学に関するお問い合わせ先 E-mail: recruit@kyotophilo.com

♪「友の会」会員随時募集中♪

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています

【年会費】 1口 1,000円

【期間】 ご入会いただいた月より1年間

【特典】 1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待

2. その他演奏活動のご案内

3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ Tel&Fax 075-605-0123(西村) E-mail: tomo@kyotophilo.com

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ

<http://www.kyotophilo.com/>

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。